

岡本宗好家集、田村宗永編『露底集』解題と翻刻（上）

大 谷 俊 太

岡本宗好の家集『露底集』については、従来、慶應義塾大学三田メディアセンター所蔵の写本一冊（以下慶應本と称す）が知られており、古典文庫『近世初期諸家集』下に、岡本聡氏による翻刻が収載されている。ただし、慶應本所収歌は「年内立春」から「江上暮春」まで全て春の歌で、歌数は六百九十五首と少なくはないものの、春之部のみの端本であるとされる。その後、国文学研究資料館に収蔵された『露底集』写本一冊（ナ₁₀56、以下国文研本と称す）は、「歳（内立）春」から「閏月歳暮」までの四季の歌を収める。そのうち、春の部は十八丁分、二百十五首であるが、慶應本と重なる歌も重ならない歌もあり、総歌数の違いも含めて、慶應本と国文研本は異系統本と言える。

ここに新たに紹介する三冊本『露底集』は、下冊奥の跋文から一関藩主、田村宗永（建題）編と考えられるものである（以下宗永本と称す）。上冊には宗好詠の百首和歌五種、五十首・十五首・十三首の各定数歌に日野弘資ほかの合点が施されたものが収められる。中冊・下冊は宗好の和歌を四季・恋雑に部類・排列したもので、上記国文研本はこの中冊に当たる一端本であることになる。従って、三冊本『露底集』と慶應本とは別系統本になる。

上冊所収の定数歌は以下の八種である。上冊巻頭の目録に抛り示す。

百首并五十首十五首十三首目錄

- ①百首 山階入道左大臣家題 日野前大納言弘資卿御点 七十一首 内御褒美八首
 ②百首 従二位家隆卿題 同卿 皆点 内御褒美三十一首
 ③百首 入道前大納言為家卿題 同 七十三首 内御褒美廿二首
 ④五拾首 同 三十八首 内御褒美十首
 ⑤百首 入道光俊朝臣題 同 皆点 内御褒詞十八首
 ⑥月十五首 八月十五夜 同 皆点 内御褒美五首
 ⑦月十三夜 九月十三夜 同 九首
 ⑧百首 文龜三年 又永正十年重陽已来親王御方御差出 中院前大納言通茂卿御点 五十八首 内御褒詞十一首

ところで、以上の八種の定数歌と重なる本文を持ち、『露底集』ではなく、『宗好詠草』『宗好百首』『宗好家集』『百首和歌』などの書名で伝わる本も知られている。管見に入った伝本は次の通り。

- A 架蔵『宗好詠草』写本一冊。列帖装。江戸前期写。田村宗永筆。目録には①～⑧を掲げるが、③の百首の229「鶴川」から⑤の百首の441「野寺僧帰」までの列帖の二綴分程度を脱する。一丁表中央に大きく「上」と記し、同じく左下に「○上」と記す。

- B 内藤くすり博物館蔵『宗好家集』（492/49）写本一冊。江戸後期写。①～⑧全てを収めるが、④・⑤の順序は逆。朱による異本注記あり。

- C 宮内庁書陵部蔵『宗好詠草 百首五箇度 月十五首 月十三首』（266・439 鷹司本）写本一冊。江戸中期写。

④五十首以外の、①～③、⑤～⑧を収める。三村晃功氏は、大阪公立大学森文庫蔵の写本『故人證謔集』所収の和歌五十一首の典拠資料として、本書Cを翻刻された（『類題和歌集と公宴御会和歌の研究』清文堂・二〇二二年。猶、同氏『続近世類題集の研究——和歌曼陀羅の世界——』第二章Ⅱ第八節『故人證謔集』の成立に参照）。ただし、その五十一首の中の十九番目の一首は、本書Cには収められていない④「五十首」中の一首（320番歌）であり、本書Cが『故人證謔集』の直接の典拠資料とは言えない。

D 宮城学院大学図書館蔵『百首和歌 宗好上』(911.H1510) 写本一冊。江戸中期写。外題「露底軒式百首 弘資卿皆点」②・⑤を収める。奥書「右之百首日野大納言殿皆点御添削御褒美等有之／貞享元年七月九日 四三子」。「元禄七甲戌」 「」（国書データベースの画像に拠る）

E 国文学研究資料館松野陽一文庫蔵『百首和歌』(54・62) 写本一冊。江戸中期写。②・⑤を収める。奥書「宝暦元年卯正月吉祥日 持主莊左右衛門書」。「仮名遣近道之事」と合写。

F 祐徳博物館中川文庫蔵『宗好百首』写本一冊。江戸前期写。⑤のみ。合点・添削・評語なし。

G 彰考館蔵『宗好詠草』写本一冊。①～⑧の全て所収。（福井久蔵『大日本歌書綜覧』に拠る。原本未確認）

上記、A・BおよびGは、少なくとも「目録」の上では八種の定数歌が全て揃っている。宗永本『露底集』の上冊に当たることになる。特にAは、料紙が斐紙の列帖装で、その筆跡から田村宗永自筆であると考えられ、かつ、第一丁表に「上」とあるのを上冊であることを示した書き付けと見るならば、『露底集』上冊の編者自筆本であることになる（ただし、未装丁であり、運筆も早いものなので、清書本ではなく草稿段階の一本とするべきか）。

以下、本稿に於いては宗永本系統『露底集』上冊部分の翻字を行うが、底本としてAを採用し、Aに脱する部分について宗永本の本文を用いることとする。

尚、宗永本の書誌事項は以下の通り。

写本。三冊。江戸前期写。縦二七・〇糎・横一八・三糎。五つ目袋綴。楮紙打紙。錆浅葱色鳥の子表紙。外題「露底集 上(中・下)」(左肩・無地鳥の子題簽・墨書、田村宗永筆か)。内題なし。上冊、墨付五十七丁。中冊、墨付六十七丁。下冊、墨付五十丁。各冊とも、遊紙前一丁。半丁十二行書き。題・歌各一行。筆者不詳。また、Aの書誌事項を追加すれば以下の通り。

写本。一冊。江戸前期写。縦二二・五糎・横一六・四糎。列帖装。仮綴。但、第二丁表に金銀砂子が一部付着する。見返しに金銀砂子の一部とすれば一旦装丁が為されていたものか。料紙、斐紙。墨付二十二丁と十四丁。③の百首の229「鶴川」から⑤の百首の441「野寺僧帰」までの十六丁程、列帖の二綴分程度を脱する。半丁十一行書き。題・歌各一行。一丁表中央に大きく「上」と記し、同じく左下に「〇上」と記す。

〔翻刻凡例〕

- 一、本稿には宗永本系統『露底集』上冊部分の翻字を行う
- 一、目録、1番〜228番および442番〜578番の歌はA田村宗永自筆本を底本とし、229番〜441番は宗永本(架蔵)『露底集』上冊を底本とする。
- 一、翻字は原則として原本通りとする。但、以下の項目については改めたところがある。
- 一、旧字体・異体字・合字は原則として通行の字体に改めた。
- 一、適宜、句読点・並列点を施し清濁を分かった。
- 一、割書部分は《》で括り示した。

一、見せ消ちは網掛けで示した。

一、原本では、題・和歌各一行で記載されているが、題を和歌の上部に記し、一行にまとめた。

一、虫損・抹消等による判読不能箇所は、□で示した。

一、和歌には通し番号を振った。

一、その他、私の注記事項は（ ）で示した。

〔翻刻〕

百首并五十首十五首十三首目録

百首 山階入道左大臣家題 日野前大納言弘資卿御点 七十一首 内御褒美八首

百首 従二位家隆卿題 同卿皆点 内御褒美三十一首

百首 入道大納言為家卿題 同七十三首 内御褒美廿二首

五拾首 同三十八首 内御褒美十首

百首 入道光俊朝臣題 同皆点 内御褒詞十八首

月五十首 八月十五夜 同皆点 内御褒美五首

月十三夜 九月十三夜 同九首

百首 文龜三年 中院前大納言通茂卿御点 五十八首 内御褒詞十一首

又永正十年重陽巳来
親王御方御差出

詠百首和歌

宗好上

- 1 年内立春／すさまじと見し影もなし春立てかすむしはすの月の曙
- 2 早春霞／のどかにも今日より春に曙のやまぐちしるく霞たな引
- 3 子日松 桑まゆのいとならねどもくる春の長き例にひく子日かな
- 4 雪中鶯 淡雪のふるをやいとふ梅がえにかさを縫てふ鶯のこゑ
- 5 野若菜 わかなつむ袖ものどかに花がたみめならぶ人のおほきのべ哉
- 6 梅風 通雅／空焼もかほりあはせて玉すだれ隙もとめいる梅の下風（／＼）雅は朱筆
- 7 柳露 ぬきとめよ柳のいと珍重に候の春風に乱れそひたる露の白玉
- 8 春月 哀ともみしは昔の春珍重に候の月老の涙におもがはりして
- 9 春雨 春雨は降ともわかで暮深くかすむ軒ばにをつる玉水
- 10 寄雲花 あくるより色香まがはで山桜花にわかる、嶺のよこぐも
- 11 寄霞花 さほひめのかすみのそでにあまるらし咲てうれしき花の色かは
- 12 寄月花 めでよ猶老ともならじ物思ひなしてふ花に宿る月影
- 13 寄露花 つゆならぬ心をあかず花の上にをくとは詠めぬとは惜みて
- 14 寄風花 はる風に散しく華も八重垣雅にほひにとづる宿の曙
- 15 寄雪花 はなの香を麓にさそふ風なくはさながら雪の明ぼの、山
- 16 帰雁 したはしよ心とむべき花にさへ名残思はず帰る雁がね
- 17 春田 かねす田に猶やすからずみゆる哉めづらしく候うしや車をかけはなれても

18 河款冬 花の後も春は有とや吉野河をくれて匂ふ岸の山吹

19 松藤 松にこそ分てえならね藤かづらはふきあまたに咲か、れども

20 暮春 行はるの形見がてらに残しをけかすみの衣一重成とも

21 夕卯花^{鳥丸} 月またでかへらん道も卯の花の夕闇しらぬかげはたとらじ^{鳥丸}（は朱筆）

22 卯月郭公 うぐひすはかへれる谷の古すいま出て夏知山郭公

23 五月郭公 忍びねもや、うちとけぬ待得たるをのが五月の山杜鵑

24 夜盧橘 五月やみ打しめる夜の空焼に匂ひをくれぬ軒の橘

25 五月雨 めづらしき晴まを見るも物ごとに猶うちしめる霖のころ

26 螢 ぬきとめぬ玉江の芦のよるくくに思ひ乱て飛螢かな

27 夏草 しげり行垣ねのむばら打かほり涼しく結ぶ花の上つゆ（A本宗永本に評語なし。B本に「異本ニ可宜候」とあり）

28 夕立 あらましく竹のは山に吹かぜの跡よりきほふ夕立の音

29 夏月 すゞしきは霜夜覚てつるの鳴真砂地遠くすめる月かけ

30 納涼 せき入し岩ねの清水すゞしさに今こん秋もくみて知る、

31 初秋露 たちそめてまだ馴やらぬ秋にさへ心も置ぬ袖の白露

32 閑居秋風 今よりの行末いかに淋しきは馴ぬる宿の秋の夕暮

33 野草花 わけ来つるのべの真萩のすり衣袖もすそも色に露けし

34 曉鴈 哀又たがね覺をかさそふらんよふかく過る初雁のこゑ

35 深山鹿 しか計は山に聞し声だにも哀は深きね覚成しを

- 36 夜虫 〳夜を寒みあやなときはの名のみして枯よろしく候行霜の松虫の声（〳〳）雅は朱筆
- 37 杜月 秋かぜにとひそめしより夜比て経て馴る生田の杜の月かげ
- 38 江月 こと、はん堀江の月の都鳥昔もかゝる光り有やと
- 39 河月 〳みがくれぬつきかけ清し河のせになびく玉もの底もあらはに
- 40 浦月 〳澄月の哀もふかし須磨のうらや波よろしく候爰許によるのね覚めは
- 41 嶋月 〳詠めやる波の千里の哀さへまがきの嶋の月に籠りて
- 42 山朝霧 〳朝日さす尾上は晴て山本の霧尤に候よりたてる松の一むら
- 43 海辺擣衣 〳八重ぶきの芦屋の里の蚕衣夜寒に添てうつ隙もなし
- 44 庭菊 〳仙人の汲し流れとみる計きくの下行庭のやり水
- 45 雨中紅葉 〳降雨のそむるにつけて染まさる心も千入みねの梔ば
- 46 河辺紅葉 〳影うつす紅葉る色こき谷河の水の緑も秋をみすらん
- 47 田家秋寒 〳あれまさるかりほの庵に守侘ぬよなく〳深き霜のをくて田
- 48 野草欲枯 〳行秋の末の、ま葛花す、きからすうらみやしもにかさねん
- 49 山家秋暮 〳柴の戸やしばしとまらで落椎のしゐても惜くくる、秋哉
- 50 閏九月尽 〳名残猶まさきのかつら長月をくり返しても終に暮ぬる
- 51 初冬時雨 〳降雪のしらふをいそげ箸鷹のと山時雨て冬は来にけり
- 52 谷落葉 〳散しける木へてはや深き谷川の氷らぬ先に音むせぶなり
- 53 寒草霜 〳置霜にしばしおほふと見し袖もひとつ枯の、薄村萩

- 72 寄秋月恋 身を秋もなぐさむやとてみる月に千々の思ひぞかこち侘ぬる
- 73 寄秋露恋 よしさらば我身を秋の露とだに消ばやかゝる物は思はじ
- 74 寄関恋 しのおればあやな心のせきすへて夜比へだつる逢坂の山
- 75 寄橋恋 なみだこそ袖にこぼるれおぼたゞのいたゞの橋のけたぬ思ひに
- 76 寄鏡恋 ともにみし影はかゞみに残るとも涙くもらばかひやなからん
- 77 寄衣恋 恋衣中にへだて、いつ迄かつけぬ恨に夜をかさねまし
- 78 寄船恋 とりとめぬ契おもへばうき中やつなげる舟のたくひ成らむ
- 79 寄心恋 もらさじと思ふも末のいかならん心ひとつにつゝみ余らば
- 80 寄涙恋 せきあえぬ心の内の滝よりやみだれて落る袖の白玉
- 81 関鶏 とざしをもわするゝ関に鳴鳥は治れる代を告る声かも
- 82 名所鶴 あさりするつるやさながら和哥の浦の芦辺に残る雪のむら消
- 83 名所松 年ごとにみどりをそへて住吉や神代の松の陰ぞふりせぬ
- 84 名所滝 よにまじる心のちりをいつか此吉のゝ滝になれてすゝがん
- 85 名所橋 〳あやうさも中〳みえず立こめて霧の上行木曾のかけ橋
- 86 名所浜 〳春秋に心をよする浪の上の詠つきせぬ住よしの浜
- 87 鞆中雲 〳分来てもいづこかやどり白くものかさなる山の嶺のはるけさ
- 88 旅泊 〳ふるさとに立かへるさを見るゆめは覚てうきねの床のうら波
- 89 漁舟火 〳なに波江やくるゝ芦間に螢かとみえて数そふいさり火のかげ

90 眺望 夕日かげさやけき波に数みえてをのがうらく帰るつりぶね

91 故郷雨 さびしさに馴ても侘ぬ里はあれてふり行雨の夕ぐれ空

92 山家嵐 そよさらにゆめも結ばじさゝの庵深山の嵐なれて聞はずは

93 田家水 秋過て人も音せずひたはへし山田の水のもるに任せて

94 暁夢 通 かねの音に末もみつがぬ名残あれや半絶たる夢のうき橋

95 懐旧 遠からぬ身の昔だに忍ばるゝ事を数多に過る年月

96 寄夢述懐 おどろかぬ身のおろかさよ程もなき夢の此世と思ひとりても

97 秋述懐 小山田のひたすらになど捨もせで秋はてし世に心ひくらん

98 神祇 三輪の山立杉むらはすぐなるをうけ引神の心ともしれ

99 釈教 いつまでかくるしき海にしづまゝし御法の舟のよるべ知ずは

100 秋祝 くもりなき月を例にいく廻り珍重に候限りしられぬ御代の秋哉

右いづれもよろしく候歟。猶趣向等甘心合愚墨之。

七十卷首

弘資卿判

詠百首和歌

宗好上

春廿首

- 101 曉立春 山かづら千里をかけてくる春の明行嶺に見えてかすめる
環重に候
- 102 溪余寒 づらゝある谷の岩陰猶さえて春をよそなる山風ぞふく
通茂卿 おもしろく候
- 103 檜原霞 三輪の山なべてかすめるよそ目にも檜原が上は深さわかれて
- 104 杜霞 絶くくに梢もみえて春がすみたつや間遠の衣手のもり
めづらしく候
- 105 名所鶯 哀その春や昔と音をぞ鳴なれも老曾のもりの鶯
- 106 若菜 早苗とる佛はやく乙女子が沢田のねぜり打むれてつむ
- 107 草漸青 霜枯に見し面かげも色かへて緑そひ行まの、かや原
- 108 里梅 難波潟匂ひもみつのうらかけて里よりあまる梅の春風
- 109 門柳 くり返しみどりそひ行春を経て老せぬ門の青柳の糸
よろしく候
- 110 初花 めづらしと今朝は先みん散歎き待し恨も花に思はで
おもしろく候
- 111 朝花 いひしらず袖の香ふかしさく花の木本ながらねての朝けは
- 112 峯花 風越のみねの名のみに今しばしさそはぬ花の盛をもみん
は
- 113 嶋花 浪こゆる興津小嶋に咲はなの色もひとつにかほる浦かぜ
おもしろく候
- 114 残花 ちらで猶のこれる花はくれはてぬ春を心にあかずとぞみる
よろしく候
- 115 浜春月 吹はらふ浦風絶て白はまのまさこ地遠くかすむ月かげ
- 116 湖帰雁 見るがうちに遠ざかりつゝ志がのうらや汀の波に帰るかりがね
珍重に候
- 117 松藤 藤なみも幾千代こえんさゞれ石のなれるいはほの松にかゝりて
- 118 苗代 せきいる、小田ぞうるほふ秋は又もるべきひたの苗代の水

- 119 折款冬 ちらぬまに手折てみばや石ばしる滝波こゆる岸の山ぶき
- 120 暮春 けふのみと永き春日も山鳥の尾上よろしく候のかねのこゑにくれぬる
- 夏十五首（A本では「十首」とあり「五」を脱す。宗永本に拠り補）
- 121 遅桜 春さえし氷室の山の遅桜みな月かけて猶のこらなん
- 122 岸卯花 谷川の氷打出し波も又岸ねにみせて咲るうのはな
- 123 待郭公 なかでやはしるて待みん郭公村雨過る月の明ぼの
- 124 海杜鵑 舟出してしたひきけとや和田の原八十嶋遠く鳴鸞
- 125 遠郭公 ほとゝぎすまだほのかなる曙の山本とをく洩す一こゑ
- 126 瞿麦 ちりならぬ露はらふなよ床夏よろしく候の花の籬を過る夕風
- 127 岡辺早苗 植わたす岡べのさなへ松のはのひとつ緑になびくすゞしさ
- 128 樹陰照射 鹿まつといふ程もなく明ぬらしこのまのほぐし影しらみ行
- 129 五月雨 日かずはやふるさみだれに水越て庭も籬も浪のうき嶋
- 130 鶉河 うかひぶねかゞりさしそふ夏箕河月をもしらず山陰にして
- 131 檐盧橘 立ばなの匂ひもあかず梅ちりし春は昔と忍ぶのきばに
- 132 旅夕立 尾上より夕立晴て旅衣めづらしく候すそのに見ゆる虹の一すぢ
- 133 野螢 うへもなき思ひを見せて煙たつふじのすそのに飛螢かな
- 134 納涼 わきかへるいは井の清水結ぶ手に夕も秋もまたぬすゞしさ
- 135 六月祓 見し花の春わすられぬ桜麻をながす御そぎに夏もくれぬる

秋二十首

- 136 早秋
 うちつけに哀しられて身にぞしむ日をへばいかに秋の初風
- 137 七夕別
 立わかれ又ひととせを待程めづらしく候や遠き渡りの天の川波
- 138 荻風
 荻すゝきまだ音たてぬ秋風を独待とる庭の荻原
- 139 籬萩
 吹はらふ風をな待そそうす霧艶に聞え候のまがきの小萩霜おもくとも
- 140 行路薄
 末遠く分くらすのゝはつ尾花まねく方にや枕からまし
- 141 田上雁
 岡のべの里輪の小田に打むれて落穂ひろふやをしねかり金
- 142 外山鹿
 はし鷹の外山の紅葉色よろしく候に出て妻恋すらし棹鹿の声
- 143 原露
 つゆふかき真葛が原は恨あるたがうき中の袖やみすらん
- 144 夜虫
 契らねば誰か蓬生とふべくも覚えぬ露に松虫の声
- 145 渡霧
 渡船ほのかに見えて山の名の朝日うつろふ宇治の河霧
- 146 駒迎
 相坂や絶ていく代の駒迎おもしく候昔の秋に引かへさばや
- 147 関月
 須磨の浦やせき吹越る秋風にうみづら遠くすめる月かけ
- 148 竹間月
 風わたる竹のは山の時雨かと聞ばさやかに月ぞ洩くる
- 149 浦月
 藻塩くむすまのあま人うらなみの月にもさぞな袖ぬらすらん
- 150 古宅月
 あれはてゝ露けき宿の蓬生に所得つゝもやどる月影
- 151 浪月
 鳩の海や月かけさえてよせかへるさゝ浪ながらしく氷哉
- 152 擣衣
 風さそふ音はみだれて片糸のこなたかなたにうつ衣かな

153 秋時雨 〱 小山田の夕日のかげも晴くもりおしねほしあへず降時雨哉

154 江紅葉 〱 もみぢばの陰をうつしてから錦あらふ色こき秋の江の水

155 九月尽 〱 月をめで露を悲しむ数々の秋の哀も今日につきぬる

冬十五首

156 初冬 〱 冬はきぬ軒の山柿紅おもしろく候にそめて残れる色も淋しき

157 滝落葉 〱 滝つ波いろ染かへてくれなゐに落る紅葉ぞ潤瀬ともなき

158 庭霜 〱 をさわたす野辺いかならん所せき庭めづらしく候だに今朝の霜のはつ花

159 柴霰 〱 柴車をちくる峯に音そひてあられ吹敷風のはげしさ

160 嶺雪 〱 あかずみてわすれぬ花の傍にかへる芳野、嶺の白雪

161 杉雪 〱 降つもる雪には堪ぬうつほ木と見えて幾年杉の下折

162 杜雪 〱 柏木のはもりの神もあかずみん雪よりかくる杜の白ゆふ

163 枯芦 〱 のこる日のかげも程なく暮る江の蘆のは白く霜ぞ置そふ

164 杣寒月 〱 霜寒み名こそ朽木の杣の月冬も光をはなやかにして

165 礮千鳥 〱 有明の月もさしてのいそ衝おもしろく候つれなき妻に別れてや鳴

166 冬暁 〱 ねや寒く暁かけて置わたす霜に絶たる夢のうき橋

167 河水 〱 閉そふる氷やいく重みなせ河珍重に候有て行てふ音も聞えず

168 鷹狩 〱 あかず猶分こそゆかめくる、をも白ふの鷹の末野遙に

169 沢水鳥 〱 はるは又若なつむべき沢水にむれるる鴨の青羽をぞみる

170 歳暮

／＼いかばかり今日おどろかん年もはやくる、日数をかねて知ずは

恋廿首

171 不逢恋

／＼夢にだに逢としみえばつれもなき現のうさも慰めてまし

172 切恋

／＼思ひわび消んいまはの夕ともしらでや人のつれなかるらん

173 遠恋

／＼へだてつる境も遠し八百日行浜のまさごを身の思ひにて

174 近恋

／＼うしや唯声聞計いひよれど逢よろしく候をゆるさぬ心つよさは

175 閑居恋

／＼とはるやといく夕つゆに鳴虫のまつも空しき蓬生のやど

176 忍恋

／＼思ひかね人にもらずとみし夢も覚る現に先ぞ驚く

177 片恋

／＼朽ぬともかばかりいかで歎かましかたみにしほる袂成せば

178 別恋

／＼わりなしや心とけても見えぬまに明るよつらく急ぐ別は

179 負恋

／＼つれもなき人の心にまぐず原扱も恨は猶のこりけり

180 逢夢恋

／＼覚てだにゆめとはわかみえず逢とみしおもしうも影残るねやの手枕

181 後朝恋

／＼おき出てよふか、りける名残迄今朝は覚えてそふ歎哉

182 聞恋

／＼今しばしきかまほしきを玉琴のほのかなる音に心ひかれて

183 久恋

／＼こひの山分ていつ迄こり果ぬ歎きながらの年をつま、し

184 白地恋

／＼ほのかにも見しや車の下すだれしらず思ひのかゝるべしとは

185 恨恋

／＼もらすぞよいふにまさると恨をもさらずは人の思ひ知らじと

186 祈恋

／＼御祓してたむくる幣に靡くべきしるべ嬉しき加茂の河かぜ

- 187 絶恋 折くはくべき宵ともみし中の絶めづらしく候て跡なきさゝがにのいと
 188 契恋 とりかはす印もあれななをざりの契是又珍しく候りは人の忘れもぞする
 189 偽恋 頼みこし偽つらく玉の枝ことばの花は色ことにして
 190 変恋 かはるべき中ともしらずうちとけておもしらく候心みえける程のくやしき

雑十首

- 191 寄衣雑 ひとりあけ紫ふかき宮人の衣のいろに品も別れて
 192 寄枕雑 老らくの心しづけき夕まどひ起珍重に候臥なれてあかぬ手枕
 193 寄花雑 うつろへば又さしかへて花かめにかはる色香ぞ宿にふりせぬ
 194 寄市雑 いたづらにあかし暮して何事をうるまの市のさはぐ心ぞ
 195 寄舩雑 うらやまし浪にかべて釣おもしらく候の舟よにつながれぬ人も有けん
 196 寄橋雑 代々かけて朽のこりける名斗よろしく候は今も昔のまゝの継橋
 197 寄鐘雑 折にふれかねのひゞきのかはる哉面しらく候風の夕霜の明ぼの
 198 寄苔雑 今もその蒔絵のかたにうつさば物語の心に候歎めづらしく候や岩ほに青き苔の緑を
 199 寄木雑 氷とくはるを待得て名取川波の花かるせゝの埋木
 200 寄水雑 ところはたえぬやいくよ山河よろしく候の岩ねとめくる水のしら波

右いづれも珍重候。任憑意合之。

弘資

詠百首和歌

- 201 立春 山桜風ふかぬよにあくまでも殊面白く候みるべき花の春は来にけり
鳥丸
- 202 朝霞 氷しもとけぬる浪の音羽河けさや霞に又むせぶらんまた〔鳥丸〕は朱筆
鳥丸
- 203 谷鶯 うぐひすや鳴て告らん光りなき谷にも春のよそを、のならぬ音を〔鳥丸〕は朱筆
鳥丸
- 204 残雪 まださゆるみやまも春と松の葉の緑そひ行雪の村消
おもしろく候
- 205 若菜 芹なづな摘手に思ふ秋も又めでなん野辺の七種の花
- 206 里梅 まつ人のあらぬ里をも梅の花匂ふ春辺はかれずとはまし
- 207 簷梅 わすれじなあやめ橘かほるとも馴行軒の梅の匂ひは
- 208 春月 いとゞしく老の涙にかきくもる霞むがうへの春のよの月
尤に候
- 209 春曙 面かげのいつは有とも梅かほり鶯来鳴はるの明ぼの
- 210 帰雁 故郷の春いか計咲花に心もとめずかへるかりがね
- 211 春雨 あづさ弓はるのものとて降雨もよるこそ増れ音のしづけさ
- 212 岸柳 みがくれぬ玉もとみえて河の瀬になびく岸根の青柳の糸
- 213 待花 もる月の秋よりもうし山桜待しこのまの心づくしは
- 214 初花 見る花のいつわすれめや咲始て又類ひなき今朝のいろかを
- 215 見花 花もしれ見まくほしさにけふ幾日いざなはれ来て馴るこの本
- 216 花盛 咲そめて友待雪のと見し花の梢も今日ぞ埋み果ぬる
珍重に候。おもしく候。
- 217 落花 うつり行日数を花の嵐にてかこつ方なく散さくら哉〔鳥丸〕は朱筆
鳥丸

- 218 款冬
 ↓降あめに咲山ぶきの八重ひとへぬれても清き花の色かな
- 219 池藤
 咲かゝる松より越て池水の汀に高きはるの藤波
- 220 関暮春
 ↓花ぞめの形みもとめず明日は又かへん衣よろしく候の名もうし
- 221 更衣
 ↓袂よく清くとも又あさぎぬめづらしく候に花の衣をかへまくもうし
- 222 卯花
 ↓久かたのかつらのたねや是ならん卯花月よ照す光りは
 鶯の声聞しよりまたれけり同じ古すの山ほとゝぎす
- 223 待郭公
 咲残る花よりもけに珍しく青葉がくれに啼ほとゝぎす（この一首A本・宗永本ともに脱す。B本に拠り補う）
- 224 聞郭公
 つれなしと名にこそたてれ待みても年に稀なる山杜鵑
- 225 郭公稀
 ↓匂ひさへ又とぢそへつふる里のむぐらにおほふ軒の橘
- 226 故郷橘
 降雨のはれ間を待て夕附日さすや岡辺の早苗採也
- 227 早苗
 ↓けふいくかみかさ増りて広瀬河浅きせ見えぬ霖のころ（以上、A本に拠る）
- 228 五月雨
 ↓夕立の名残の浪も高せ河うぶねの篝影ぞみだる、（以下、宗永本に拠る）
- 229 鶺鴒川
 草ふかみすだく螢もかすがの、烽火の野べのなさへかくれぬ
- 230 叢螢
 ↓それとなき虫のこゑして秋またぬ花も草葉にまじるのべ哉物語にそこはかとなき虫のこゑづくに候哉。おもしらく候
- 231 夏草
 ↓夏の夜は南をめぐる月影も奥あらはなる閨のすゞしさ
- 232 夏月
 風はやみ夕だつ雲の足がらや八重山晴てうつる日のかげ
- 233 夕立
 ↓夕日影もるいろうすし涼しくも鳴せみのはの衣手のもり珍重に候
- 234 杜蟬
 御祓して涼しく成ぬ立田川夜半にや秋の越てきぬらん
- 235 夏祓

- 236 早秋
 吹をくるいな葉の風も音がへて早田のほなみ秋や立らん
- 237 七夕
 天の河代々をかけても一年にひと夜はつらしかさ、ぎの橋
- 238 萩風
 聞からに哀もうさも身にぞしむいかなる風の萩に吹らん
- 239 萩露
 みる心くだけでぞ思ふ風あらき小萩が上の露のしら玉
- 240 女郎花
 露になびき風に心をうごかせて誠すくなき女郎花かな
- 241 夕虫
 草がくれ今ぞほのめく夕附日さすや岡辺のまつむしのこゑ
- 242 夜鹿
 棹鹿のつれなき妻を頼めても待よも何のかひよとや鳴
- 243 初雁
 玉づさを送るも待も誰となくうはの空なる初かりのこゑ
- 244 秋夕
 誰秋にながめそめぬる夕より露も涙も袖ぬらすらむ
- 245 山月
 山風の雲吹拂ふかひがねや出てさやかにむかふ月かけ
- 246 野月
 ぬきとめぬ玉田よこの、秋風珍重に候にみたる、露をみがく月かけ
- 247 河月
 片ふちの岸根に深き柳陰おもしう候くまなき月の隈となりぬる
- 248 江月
 あかず猶あきの哀もこもり江に舩さす棹の長きよの月
- 249 浦月
 光りそふ是や寔の玉ならん衣のうらにすめる月かけ
- 250 籬菊
 さきそめて日をふるま、にしら菊のまがきは山とつもる雪かな
- 251 擣衣
 ころもうつ音は哀も深きよの涙もよほす妻となるらん
- 252 暁霧
 横雲の別る峯はさだかにて山本くらき秋霧のそら
- 253 岡紅葉
 水ぐきの岡のやかたのうす紅葉ねての朝けの色ぞそひ行

- 254 庭紅葉
 〱 又かゝる色をやは見んしめゆひし面白候かきねのぬるで鳶のもみち葉
- 255 九月尽
 〱 かたへより時雨来にけり秋と冬と今や行かふあかつきの空
- 256 初冬
 〱 立そむる今朝より冬の色みえて霜にうつろふ野への寒けき
- 257 時雨
 〱 村しぐれ降かともれば晴るより星めつらしく候さやかにて雲も残らず
- 258 落葉
 〱 みな河をとすつくばの山風につもるこのはも測と成行
- 259 朝霜
 〱 いは橋の夜の嵐もさえぬべしあくる朝けの霜の寒けさ
- 260 寒草
 〱 風さゆる野へのむら萩糸薄よる〱霜に結ほ、れゆく
- 261 千鳥
 〱 白波に千鳥むれたつ遠方の入日もくもる浦のゆふなぎ
- 262 水鳥
 〱 いけ水にちりしこのはの後も猶にしきをたえぬ鴛の毛衣
- 263 氷始結
 〱 散つもる紅葉ながら閉そへて氷色ある山川のみづ
- 264 冬月
 〱 霜むすぶ萩の枯葉は風たへて軒端静にさゆる月影
- 265 鷹狩
 〱 狩衣げに大かたの鷹かひは出はへあれや翁さびても
- 266 野霰
 〱 古にけるのべの御幸の跡とめて今も霰の玉やちるらむよろしく候
- 267 浅雪
 〱 雪はまだ降そむる色も朝日影うつる方よりやがてとけぬる
- 268 積雪
 〱 つもりけり雪は麓にちりひちの唯一時のやまとなる迄
- 269 炭竈
 〱 淋しさは塩やくうらの煙にもたち増りぬるみねのすみかま
- 270 歳暮
 〱 いとはやも過る月なみ老の波又立かさね年老のなみをかさねる、よし尤候や越まし
- 271 寄月恋
 〱 つきに猶まさるなげきをあやなくも誰心より詠なれけん

- 272 寄雲恋 白雲の立なもいかでいとふべきわが身のかたになびかましかば
- 273 寄露恋 〱よしや人身の思ひ出に結びをけ露計なる契りなりとも
- 274 寄雨恋 〱待宵の契りむなしき雨の音にわがおもひ河増りもぞする
- 275 寄風恋 〱吹そめし人の心の秋かぜやたえて音なき中となりけん
- 276 寄山恋 〱いつまでか歎をこひのおもに、て忍ぶの山に分まよふらむ
- 277 寄関恋 〱宵々の夢路とをさぬせき守やうちもねられぬ思ひなるらん
- 278 寄原恋 〱絶にけり人の契りの浅茅原通ひし道はあともなきまで
- 279 寄橋恋 〱つれなくて絶しながらの橋柱我おもひのみかけぞはなれぬ
- 280 寄海恋 〱あさはかになど顛れし袖のうみ塩干に見えぬ石も有よに
- 281 寄木恋 〱頼まれぬ人の心の末の松すゑつみにうき浪や越なん
- 282 寄草恋 〱紫のねをつゝめども落そむるなみだや恋のゆかりなるらん
- 283 寄鳥恋 玉章をかけてくるてふ雁もあるを人の心のあき風ぞうき
- 284 寄虫恋 とはれずは袖にかゝるもさゝがにのいとゝ苦しきふしやそはまし
- 285 寄獣恋 〱せき守のうちぬる隙を頼みてもとがむる犬のこえぞわりなき（宗永本に評語なし。B本に拠る）
- 286 寄玉恋 おもひせく心のたきも終に我袖に乱れて落るしらたま
- 287 寄鏡恋 〱つらさのみますみのかゝみうらみても見し佛は立もはなれず
- 288 寄枕恋 〱あぢきなく逢はわかるゝことはりも忘れてかはす夜半の手枕
- 289 寄衣恋 〱見そめしはたゝ行ずりのこひ衣など打つけに露みだるらん

290 寄糸恋
 待ことも絶しを今宵かた糸のあはをの契よりもあはゞや

291 浦松
 波よするうらのす崎のそなれ松なれて幾年苔のむすまで

292 窓竹
 深みどり千尋ある陰に茂り行生さき籠る窓の若竹

293 山家嵐
 さびしさやうきことの音に通ふらん世はなれてすむ峯の松風

294 田家
 早苗とる比よりも猶小山田は稲葉刈つむあきぞにぎほふ

295 古郷
 ふる里といつよりならの飛鳥風いたづらに吹音はかはらで

296 海路
 敷波にしほる、袖のみなと舩なれぬうきねぞ物はかなしき
よろしく候

297 鞆旅
 たびぞうき珠らしとみる山を越浦はの波に心よせても
是又よろしく候

298 述懐
 うら山しそれも花咲秋はあらん哀老その杜のした草
おもしらく候

299 神祇
 君が代にはこぶ御調の舟の上も安くや守る住よしの神

300 祝言
 見るも又聞もさら也鳥のこゑ花の色かも長閑なるよは
珍重に候

任愚意合点之 七十三首

弘資

詠五十首和歌

春十二首

301 初春
 いつはとはわかれぬ御代ののどけさもさらに知せて春はたつらん

302 野霞
 そことなき霞に春は大江山いくの、道ぞいとゞはるけき
よろしく候

- 303 朝鶯 春の色を外にもとめし朝日影うつるまがきのうぐひすのこゑ
- 304 梅薫袖 うつし植て花みるはるの嬉しさもつゝみあまれる袖の梅が、
- 305 柳 春をしるやなぎの糸に千世かけてたえぬ契りを結びそへばや
- 306 湖帰雁 さゝ波や浦より遠にかへるかり鏡の山にかけもとゞめず
- 307 春暁月 閨のとのこる灯かげうすし明行月も空にかすみて
- 308 待山花 咲ばとく散をうしとや山桜またるゝ程の日数経ぬらん
- 309 翫花 ちる花の波こす迄もあかれじな磯山珍重に候ざくらみなれそなれて
- 310 河落花 風さそふ昨日も今日も飛鳥川淵せかはらぬはなのしら波
- 311 笹款冬 故さと、誰住すてし跡ならんかすみのまがき八重の山ぶき
- 312 暮春 名残あれや散にし花の木陰までしたふにあかぬはるぞくれ行
- 夏七首
- 313 新樹 さまぐゝの木々の若ばやうすき内こきが中にも色を分らん
- 314 郭公 ほとゝぎす猶つれなさは有明の月に残して過るひとこゑ
- 315 早苗 乙女子かうたふ田哥の一ふしにとる手のさなへなびくとぞみる
おもしらく候
- 316 五月雨 しめやかにふるもいとはず思ふどちかたらひくらすさみだれの比
- 317 夏草 池水はてる日にかけて庭の面に茂る草葉ぞふかく成行
- 318 螢 せきいるゝ水の流に影みえて端居涼しく飛螢かな
- 319 納涼 玉琴に風吹そふるこすのとは夏のしらべもあきにかよへる

秋十二首

- 320 七夕 〳この葉の花しにほはゞ七種めづらしく候にそへて手向んほし合のそら
- 321 萩 一しきりたゆむと聞は打そよぎ又音たつる萩の上かぜ
- 322 閑庭薄 〳花すゝきわくる人なき庭の面は置あまる露ぞ独こぼるゝ
- 323 夕虫 〳手向にと鳴や鈴虫ゆふかけておもしらく候宮居ふりぬる松の木陰に
- 324 外山鹿 〳庵近くゝもまたで鳴鹿はと山の霧に妻やこもれる
- 325 初雁 〳返す比かへると見えし程もなく珍らしく候わさ田かり金はや聞ゆなり
- 326 松間月 〳あかず猶岡部のまつの木の間より月も千年を契りてやすむ
- 327 竹間月 〳風わたる竹の小枝をもるかげや時雨を分るあきのよの月
- 328 霧 〳吹払ふ嶺より晴て麓河面白く候あらしの末に残るあさぎり
- 329 掃衣 いとまなさいせをの蟹のぬれ衣月にまきほし月にうつらし
- 330 紅葉 〳村時雨千入一しほ染分てと山につゞく庭のもみぢば
- 331 九月尽 秋に今つきぬ余波をしたふ哉春もわかれし入あひのかね

冬七首

- 332 時雨 〳小夜時雨もらぬにぬるゝ袂尤に候かな老のねざめのなみだもろさに
- 333 橋上霜 〳置霜のかゝれとてしもうば玉のよどのつぎはし冴わたるらん
- 334 氷 岩まより音も嵐に吹かへて氷によどむ山河のみづ
- 335 河千鳥 〳かれず猶つまとふ衛声さむしよろしく候河辺のち原霜ふかきよに

336 松雪 〱 弘覧風の名残も今朝みえて村〱つもる雪のまつがえ

337 炭竈 立まさる淋しさいづれもしほ焼うらはのけぶりみねのすみがま

338 歳暮 〱 身にとめてなす一ふしもかた原のくるゝを年と何歎くらん

恋六首

339 忍恋 〱 しのぶにもあまる涙をせき侘てうき名ながらもれんとやする

340 祈恋 〱 のりても神もうけずやかたそぎの行あひがたき中の契は

341 初逢恋 〱 はかなしや現も夢もわかぬまにやがて明行夜半の契は

342 後朝恋 〱 俛は猶身にしみて有明の光りおさまる明ほのゝそら

343 増恋 〱 いやましにみだるゝ末のいかならん芦辺の塩も満干こそあれ

344 恨恋 〱 今ぞ思ふあらぬ恨をかすめしは絶尤に候べきためのかごと成しを

雑六首

345 名所松 〱 散うせぬことばの種か世々を経て陰さかへ行わかの浦まつ

346 山家 〱 なれてしもすめばこそすめ柴の戸は隣も遠き岩のかけみち

347 眺望 〱 あまやすむ州崎の松の木の間より暮て数そふ漁火のかげ

348 旅 〱 夢にだに都に越ばうつの山わすれやせまし心ほそさを

349 懐旧 〱 いにしへも何おもひ出も有がほにとすればかくも昔こふらむ

350 祝 〱 曇なき御代は神代もかく山やかけしかゞみの影もさながら

任愚意合点候。

詠百首和歌

- 351 年内立春／冬かけて今朝立はるもはやせ河まだ年浪はのこる日数に
- 352 野外朝霞／ぬるみ行水の煙も立添て野沢にふかき朝がすみ哉
- 353 海上晚霞／夕なぎのかすみや幾重三保のうら松原遠く見えて暮行
- 354 山居子日／人しれぬ此山ずみもとはれけりけふはねの日の松にひかれて
よろしく候
- 355 水郷若菜／七くさも摘あらふやと水にごる河辺つたひの里のいくむら
めつらしく候
- 356 春鶯呼客／うぐひすの間人さそふこゑす也まだ咲あへぬ梅の木の本
- 357 水消田地／芹つみし汀も見えずみかさそふ沢田は今や氷とくらん
- 358 南北梅花／尋来て思ひくらぶの梅の花はつせの梢さかりいかにと
おもしく候
- 359 露暖梅開／咲梅の色香にしるし春の日の光りにあたる露の恵は
- 360 春雁離々／別つゝこなたかなたに行かりもひとつ心にとまるおもかけ
尤に候
- 361 独見春月／老は猶かすむが上にかすむよを我身ひとつと月やうらみん
- 362 閑中春曙／しづけしなはるは霞にとちぞふる葎のかどの明ぼのゝ空
- 363 柳無気力／吹とだに覚えぬ程のはる風も柳にみえてまづなびくらん
- 364 旅泊春雨／泊舟筥もる雫たえぐに聞もしづけき夜半のはるさめ
- 365 行路春草／ふみ分し道一筋の雪まよりかつ見え始てもゆる若草

- 366 山寒花遅／山ふかみまだ霜結ぶ枝の花よろしく候いつ下ひものとくるをもみむ
- 367 花下送日／今日いか馴ぬる花のから錦散是又おもしろく候しくまではた、まくもうし
- 368 落花入簾／雪ならばいとはれやせんさそひ来てすだれ吹卷花のはるかぜ
- 369 桃花曝錦／山賤の垣ねのも、は身におはぬにしき織はへほすかとぞみる
- 370 留春不駐／跡もなく暮行春は誰宿のしたふこと葉の花にのこらむ
- 371 羈旅更衣／たび衣春の日数を重ね来てしほよろしく候れし袖を今日やかへまし
- 372 残花何在／ちりのこる花のかいづこたどる也分こし山は青葉のみにて
- 373 人伝時鳥／聞ときく人伝つらし郭公我につれなきよそのはつ音を
- 374 寢覚郭公／しのび音は聞もさだめじ杜宇ねざめの床に心すまはずは
- 375 廬橘子低／実をむすぶ露の白玉数そひてはな橘ぞ枝おもげなる
- 376 民戸早苗／民もいまゆたかなる代の恵知かどた／／にさなへとるなり
- 377 袖五月雨／晴やらぬ日数おもへばをの、えも朽木の袖の五月雨の比
- 378 湖五月雨ママ、日本では「雨」／湖のうみやおりたつ雲の霖に鏡の山は佛もみず
- 379 鶺鴒廻嶋／夕附よまだいらぬ間はうかひ舟先嶋かげやさしめぐるらん
- 380 連峯照射／みねづ、き鹿もふすまやかた糸のこなたかなたのしげきともしに
- 381 里蚊遣火／ほのかにもかやりの煙立そひて夕ぐれいそぐ里のひとむら
- 382 閑庭瞿麦／ちりのよをよそに詠て静にも起おもしく候臥なる、宿のとこなつ
- 383 砂月忘夏／浦風も吹上の浜の真砂地に夏とも分ず消る月影

- 384 野亭螢火／しらずだがすむ草の戸ぞ^燈焼にほたるもまがふのべの遠方
- 385 晩夏蟬声／秋近き滝つ岩波うつせみの声ひゞきあふ山のすゞしさ
- 386 幽栖秋来／道絶えて誰待となき草のとの淋しさとめて秋はきにけり
- 387 二星適逢／稀に来てかさぬる夜半や七夕の恨もさぞな天の羽ごろも
- 388 織女惜別／七夕の絶ぬ契りも年く／にうらみかさなるきぬぐ／の空
- 389 夜深聞萩／夢さそふ萩の上風ふくるよに^{面白く候}むすびかへたる袖のしら露
- 390 萩花蔵水／さそふ水有ともみえずうきくさを^{めづらしく候}咲そふ萩の花にうづみて
- 391 女郎花露／えならずもつゆになびきて見る人の心うごかす女郎花かな
- 392 風動野花／秋風の吹をくるの、末の松尾花の浪も^{めづらしく候}こゆるとぞみる
- 393 鹿声何方／いづこともき、もさだめず吹迷ふ嵐の末のさを^{珍重に候}しかのこゑ
- 394 秋夕傷心／秋といへば入逢のこゑも夕暮の心にあまる哀そふらむ
- 395 遠天旅雁／遥なるこゑは枕の上過て又遠ざかる天つかりがね
- 396 横嶺松月／雲はらへよこほりふせる山の名のさやに待みん月の秋風
- 397 明月如昼／燈をそむける月のさやけさによる影をわする、まどの内哉
- 398 十五夜月／今宵月千里も晴て夕塩のさしのぼる影に波やみつらん
- 399 雲間稲妻／夕づきは入ぬる山の雲間より又ほのめけるいなづまの影
- 400 名所擣衣／浦かぜに音もみだれてすり衣うつや信夫の里の蟹人
- 401 霧中求泊／きりの内は泊りやいづこ白波の跡なき方に迷う友舟

- 402 伴菊延齡／袖ふれていく千世なれんつもりそふ老を隔る菊のまがきに
- 403 霜葉虫吟／鳴虫のこゑの色もやよる／の草葉の霜にかれんとすらん
- 404 紅葉出垣／しぐれには染ぬ緑の松垣をこえて紅葉の色をかしつる
- 405 山路秋過／更にけふほしあへぬ袖をしほれとや山路時雨て秋の暮行
- 406 初冬落葉／吹はらふ雲は跡なき山風に木葉しぐれて冬はきにけり
- 407 遠郷時雨／風さゆる都のたつみ雲はやみいまや時雨、うちの山もと
- 408 寒草所々／武蔵のや一もとならず枯残るこなたかなたの霜の下草
- 409 浜辺寒芦／いろさむみあしの枯葉も見えぬ迄めづらしく候今朝置わたす霜の白浜
- 410 月照網代／守あかすかいさり火さむくあじろ木のいざよふ波に氷る月かげ
- 411 連日鷹狩／いさや又しらふのたかのかり衣かさねん日数今幾日とも
- 412 薄暮千鳥／夕附日入ぬる儀に立居鳴千鳥や浦のみるめなるらん
- 413 水留水声／水無瀬川けさ名もしるく氷居よろしく候て下にかよへる音も聞えず
- 414 寒閨聞霰／ねや近きいさ、村竹そよさらに霰ふるよは夢もむすばず
- 415 水鳥馴舟　みなと江の芦分小船朝夕になれてさはらぬ水鳥のこゑ
- 416 雪中残雁／越路よりなれてもいかにかりがねのはらふ翅の雪や寒けき
- 417 眺望山雪／今朝みればゆきより外の色もなし晴て間近き遠の山のは
- 418 雪埋苔径／ふみ分てとふべき人も白雪の日数ふり行苔のかよひぢ
- 419 爐火似春／埋火のあたりはしらぬ冬籠春や来ぬると寒さ忘れて

- 420 老人惜年／老の浪昔に帰る道しあらばよどまぬ年をかくは惜まじ
面白候
- 421 思不言恋／哀そのいはでの森の下露も物おもふ袖のたぐひかなしき
- 422 祈難会恋／うけひかで我ぞくるしき誰かたに契むすぶの神のしめ縄
- 423 歎無名恋／いかで名はながれそめけんあふせなき涙の川をせくとせしまに
- 424 相互忍恋／たがかたにせきあまるらん思ひ川同じ心の人めつゝみも
おもしう候
- 425 不堪待恋／契置しそのことの葉にかゝる哉とはずはきえん露のいのちも
- 426 臨期変恋／更に猶袖しほれとや降出し雨をかごとにとはぬこゝろは
- 427 時々驚恋／折々におどろかさずはうき人の契りしことや夢になさまし
- 428 憑誓言恋／頼むにぞ長らへきぬる忘じの人のちかひや我いのちなる
- 429 深更帰恋／しほれそふ袖の涙もふかきよの露わけかへる道のさゝはら
- 430 後朝切恋／別路に消もはてなで今朝までは何かゝるらん露のたまのを
- 431 逐日憎恋／おもひのみますみのかゝみ朝毎にむかふも人の影はうつらで
- 432 非心離恋／いはにせく早瀬の浪の心にもあらで別るゝ中ぞわりなき
- 433 見形厭恋／いとふなよ心は花にとばかりをかこちよりもいふかひぞなき
- 434 披書恨恋／なぐさめも見えぬかへしに水茎の岡のくずはの恨もぞそふ
- 435 絶経年恋／橋柱たえぬる中をいかでかく昔ながらに恋わたるらむ
- 436 残月越関／相坂のせき越佐ぬ夜をのこす都の月を立かへりみて
- 437 風破旅夢／たまさかに見し故郷の夢をさへつらきたびねにかへす山風

438 嶺林猿叫／山風に峯のこのはは落尽て淋しさいとゞましら鳴こゑ

439 翠松遠家遠／植置しめぐりの小松年を経て緑おもしろく候にこもる宿ぞしづけき

440 山家人稀／淋しさもなぐさみてまし山里に冬のみかるゝ人めなりせば

441 野寺僧婦／墨染の夕のあらし音添ての寺にかへる袖のさむけさ（以上、宗永本に拠る）

442 田家見鶴／おり居るも静にみえて末広き門田のおもにあさる友鶴（以下、A本に拠る）

443 樵路日暮／山人のつま木に日をぞくらしぬるやすまん花のかげもなき比

444 晴後遠水／雨すさむ河水白く未晴て名残立そふ虹の一すじ

445 滄海雲低／海にこしの見し山のはも隔りて波におりたつ雲の一むら

446 漁舟連浪／八重ぶきの芦屋のうらの釣のふね波に隙なくみえてうかべる

447 江雨鷺飛／ふるあめにあさるかたなく浅き江の芦間の鷺や群て立らん

448 夜涙余袖／かへりこぬ昔を更に思ひねのよるの袂は波にしほれて

449 憂喜依人／嬉しきもうきせも見えて飛鳥川面白く候かはるは人を分るよの中

450 竹契週年／深緑千尋あるかげにふしなれて萬代契る末の久しさ

右取々宜候。合点候。

弘資

詠十五首和哥

451 八月十五夜／今宵てる月の光にわたつうみの千尋やある底の玉もひろはん

452 月前風／立雲のちりもすへじと吹風に今宵の月を任せてぞみる

453 月前露 吹かぜもさそひなそへそ水茎の岡のくずはの露の月かけ

454 山月 くれかゝる山本ふかき秋霧もみ^{可然候}えて尾上を登るつき影

455 野月 かげやどす花の千種をまがき^{面白候}にて野守が庵ぞ月にはへある

456 浦月 うら人のうきいとなみもわすれ貝ひろふたもとや月にほすらん

457 花洛月 四方のあらし更しづまりて見る月の都のそらぞ世にたぐひなき

458 故郷月 をきみてる露にやどりてふるさとの葎の門は月ぞ閉たる

459 山家月 隈もなく月ぞさし入山賤^{尤に候}のかやが軒端の奥端の奥もあらはに

460 月前雁 初かりの月にかけてし玉章^{めづらしく候}はおちて入江のあしてらすらん

461 月前虫 明る迄声をつくして虫ぞ鳴いかに思ひの月にそふらん

462 月前鐘 月ははや落かゝる雲の林にも猶澄のぼる鐘のこゑかな

463 寄月恋 袖のつゆをかこつもつきのよ比へば忍びはつべき身の思ひかは

464 寄月述懐 めで来つ、つもりてはうき老が身^{墨文尤に候}に月ならで又慰もなし

465 寄月神祇 鈴鹿河ふりせぬかげはながれても神代ながらにすめる月かけ

いづれも珍重々々。合点之。

弘資

詠十三首和歌

466 九月十三夜 名にたかくめで始しよの昔までさらに覚えてすめる月哉

467 月前星 是る、よの星のはやしはうづもれぬ雪と冴行つきの光りに

468 月前時雨 心あれやふるほども猶さやかなる月の外行夜半の時雨は

469 月前萩 つきさゆる霜の下萩そよく也よなかるゆめの枕に

470 月前鹿 高砂の松と契りし小男鹿や尾上の月に声絶すなく

471 花洛月 いくめぐりなれて都の秋のつきよし更科はさもあらばあれ

472 古寺月 夢さそふかねの御嵩の月かげや其暁をかけて澄らん

473 寄月忍恋 よるこそはつきにかこためひるまなき袖の涙をいかに忍ばん

474 寄月変恋 人ぞうきほの三ヶ月の有明にうつりかはるも夜比へてこそ

475 寄月別恋 名残猶俤にたつ別哉暁月の霧ふかきよに

476 寄月述懐 よそにのみ見て幾年か杉の庵わがあらましの山のはの月

477 寄月旅泊 おもひ出ん月も今夜は鞆のうらにうきねの波路漕別るとも

478 寄月祝言 ちぎり置いて月にかぞへんさざれ石のいはほとなれる代々の秋迄

右取々宜候。任管鏡之所存

僻点九首 弘資

詠百首和歌

479 立春 卷あげてむかひし雪も霞む也釣簾の外山の今朝のはつ春

480 山霞 春来てもまだ色うすく袖さむしそめて霞の衣かせやま

481 海辺霞 立そふる浪路のかすみ幾重とかけさ三熊野の浦の浜ゆふ

482 鶯 香にふれて幾春あかぬ梅がえになれもなれてや来鳴鶯

- 483 野若菜 香をとめて秋見ん花も先ぞおもふつむ七種ののべの行末
- 484 梅風 　むめが、やよもにみつらん棹姫のかすみの袖にあまつ春風
- 485 柳 　春風も払ひつくさず朝川の水のけぶりになびく柳は
- 486 春月 　思ふその昔は遠くかすめともみしよかはらぬ春のよの月
- 487 春雨 　はるさめの軒の玉水音せずは庭の真砂に降もしられじ
- 488 帰雁 　空にたつ雲は跡なき春風になれも消行遠のかり金
- 489 早蕨 　是も又ゆかりの色と紫の生てふのべにもゆるさはらび
- 490 栽花 　緑そふ柳に花を植そへてみやこの春の錦ともみん
- 491 尋花 　花にいさむ心のこまもなづむまでふる郷遠き春の山ぶみ
- 492 盛花 　待惜む歎きわすれて今日さらに物思ひなき花の下陰
- 493 挿頭華 　色にふれあかぬあまりにかざせども花はわが身の老やいとはん
- 494 落花 　うしや風さそひつくして飛鳥河瀬もわかぬ花の白波
- 495 苗代 　苗代に秋のたのみを待しづの心のたねや先ひたすらん
- 496 款冬 　咲出てこもるいろ香もあらはれぬ八重款冬の花のやへがき
- 497 藤 　春をへてあぜ行池のさゞれ水岸根の藤や波はかくらん
- 498 舟中暮春 　はるはけふくれていづくに行舟のあとなき浪にしたひ侘ぬる
- 499 更衣 　花衣きつ、馴にし日数さへかさねもやらで又やかへまし
- 500 葵 　玉すだれあふひのかつらかけそへて同じ緑の色も涼しき

- 501 待郭公 心から待夜かさねしほと、ぎすとはぬ恨は誰にかこたん
- 502 郭公遍 村雨は里わく空もをしなべて鳴音もらさぬほと、ぎす哉
- 503 菖蒲 あめ晴て夕日にみがく白つゆの玉江のあやめ色ぞすゞしき
- 504 橘 草深く里はあれども立花の花さへ実さへ葉さへふりせぬ
- 505 五月雨 さみだれのみかさやいづこますげかる野沢の汀山の滝つせ
- 506 夏草 秋またで咲もえならず夏草のしげみに交るさゆりなでしこ
- 507 夏月 うきてよるみるめも涼し夏衣面白く候うすき袖師の浦の月かけ
- 508 蚊遣火 小夜更て枕にほそき蚊のこゑはよひの煙や立すがるらん
- 509 螢 ほたる飛河辺のち原吹送る風の行手にみえてすゞしき
- 510 池蓮 蓮生る池のさゞ浪よる光る玉もしかじとみがく白露
- 511 夕立 山河の測せもわかず時の間にあだ波さはぐ夕立のあめ
- 512 納涼 弘 鳴せみのは山の露の木隠よろしく候に秋風またぬ暮ぞ涼しき
- 513 六月祓 五十鈴川涼しく成ぬふりすて、御祓する瀬に夏もいぬめり
- 514 早秋 けささそふ一葉にそへて散露も袖に先しる秋のはつ風
- 515 七夕 天河絶ぬ逢瀬はいつはりのなきよを星の空にしれとや
- 516 萩 そよぎたつ草木はあれど秋の声をわきて待とる萩の上かぜ
- 517 萩 風おほふ袖かとぞみる小萩さく花のまがきに交る尾花は
- 518 薄 つゆふかきむぐらの宿の花す、き誰思尤候ひある袖のたくひぞ

- 519 野虫 千世かけて子日せしのに鳴始る是や二ばの松虫の声
- 520 初雁 カラス 秋風にうら珠らしく聞ゆ也はつ初染の衣かりがね 花 カラス は朱筆
- 521 田鹿 啼鹿の声ぞ淋しき夕日影色ろこき稲の中にまじりて 面しろく候
- 522 秋夕 さびしさの秋にもれたる声もなし入相の鐘軒の松風
- 523 山月 曇なきかゝみをかけて山鳥の尾上さやかにすめる月かけ よろしく候
- 524 橋月 月は猶曉かけて冴わたるかげはさながら霜の板はし
- 525 浦月 心なきしはざもみえて須磨の海士のしほ焼けぶり月にたな引
- 526 社頭月 澄月に鳥居もあけの瑞籬もみえて木ぶかき杜の下かけ
- 527 古寺月 こゝろこそ猶澄のほれ初せ山尾上のかねの月の夜比は
- 528 曉鳴 床しむる沢田のしぎもかげ清き有明の月にうかれてやたつ
- 529 擣衣 小夜衣よそに聞だに臥侘ぬさゝのしのやのしのにうつ音
- 530 河霧 明わたる空もわかれず橋姫の待よながらの宇治の河ぎり
- 531 菊 さくさくきの筐に千代をしめ置て下水水や老をせくらん
- 532 山紅葉 村しぐれそめて千入のから錦たゝめる山はいくへともなし
- 533 九月尽 霜むすぶ垣ほのまくづうら枯て恨し秋も終にくれぬる
- 534 初冬 今朝よりは山風あらく吹はらふ木のはもふゆの始成けり
- 535 時雨 ふらぬより先一しきり音たて、しぐれ待とる軒の松かせ
- 536 落葉 庭の面の苔の緑も青地にて紅葉の錦風や敷らん

- 537 霜 〱よもぎふの人めかれにし霜の上に日かげならではとふ跡もなし
面白く候
- 538 寒蘆 〱残る日の影も程なくくる、江に夕霜白き芦の村だち
- 539 冬月 〱ねられずよむぐらのやどの冬の月袖の氷をひしき物にて
- 540 氷 〱吹むすぶ池のさゝ波こほるより音なき風のみえて寒けき
- 541 千鳥 〱夕日かげさすや洲崎の塩風にくもるとみればたつ衛哉
- 542 水鳥 〱さえまさる野沢の夕日かげうすく残るかたへにあさる水鳥
- 543 網代 〱あじろ守さゆる夜比の思ひもやもゆるかゞりの影に見ゆらむ
- 544 山雪 〱寒わたる湖遠く雲暗て雪にみかみの山ぞまちかき
- 545 庭雪 〱あとつげばいかにうからんふりはへてとはれぬもよし庭の白ゆき
- 546 鷹狩 〱箸鷹の外山の夕日かげ落てあかぬ狩場の暮行はおし
- 547 神楽 〱杜のかげに庭火の光や、しらく見えてほのかにあけの玉がき
- 548 歳暮 〱したふよりうさも数そふ年の暮よろしく候よしや忘れて春を向へん
- 549 初恋 〱人しれず音に鳴そめて今日よりやうくひずとのみ袖やしほれん
- 550 忍恋 〱いひ出ん思ひならねばをしこめて憂もなげきも心ひとつに
- 551 析恋 〱逢事をうけひかずとも神にわれ恨はかけじ杜のしめ縄
- 552 聞恋 〱袖ふれば猶いかならん人伝に聞さへかゝる露の乱れを
- 553 不逢恋 〱かくてのみあはでの杜の名もつらし絶ぬ雫に袖はしほれて
- 554 契恋 〱かはらじと頼む誠もおぼつかな憂偽のならばしの世は

- 573 田家雨
 守侘ぬ山田の賤が声すだれふきまく風に雨も降来て
- 574 鞆旅
 へだて行旅をしぞ思ふおもふ人な物語の取なしに候やぎにしもあらぬふるさとの空
- 575 述懐
 いかにして如何にもとめん言のははおもしらく候かき集めても花ぞまじらぬ
- 576 夢
 しるべせよ和かの浦波よるくくの夢にもかけて思ふ心を
- 577 釈教
 などてかは踏まよふべき法の道心の月のくもらざりせば
- 578 祝言
 御調物はこぶにしるし治れる国といふ国の末がすへまで

盲見五十八首

通茂